かるちゃ～ナビ

ザ・見遊（みゅ～）じあむ ……8

大阪企業家ミュージアム

（大阪市中央区）

旧東区役所があった場所に大阪市が産業創造館を建てました。その地下1階に、大阪商工会議所が、大阪発の世界をリードする企業家を育てようとつくられたのがこのミュージアムです。

主な展示は「企業家たちのチャレンジとイニベーション」。映像でのプロローグから始まり、明治の近代日本から現代まで、五代友厚、伊藤忠兵衛から、インスタントラーメンの百福まで、大阪にゆかりのある105人の実業家が紹介されています。

五代友厚など大阪ゆかりの105人の実業家が一堂に

第1ブロックは「近代産業都市大阪の誕生」で、明治維新後の紡績業の育成や、新たな金融の仕組みづくりに挑んだ企業家群像で、一番見応えがあります。第2ブロックは「大衆社会の育成」で、生活の西洋化が進むなかで、鉄道、重工業の発達や、一方では化粧品、洋酒、レジャーなど生活を楽しむ商品の開発に活躍した実業家や企業の紹介です。第3ブロックは「豊かな社会の育成」で、戦後の復興から現代の企業まで、よく見聞きする企業郡を紹介しています。

大阪産業創造館にある「大阪企業家ミュージアム」

ミュージアムメモ

▶所在地／〒541-0053大阪市中央区本町1-45▶開館時間／火、木、金、土曜日は10時～16時30分　水曜日は10時～20時▶休館日／毎週日・月曜日・祝祭日・年末年始▶入館料／大人・300円、中・高・大学生・100円、小学生以下無料　交通／地下鉄本町駅下車▶問い合せ／06-4964-7601

このシネマがえいが

「ひだるか」

リストラを共通項に「三池闘争」を今に

ヒロインの女性キャスターを演じる岡本美沙さん

1960年前後の日本。「60年安保」闘争とともに、今も語り継がれる「三池争議」のたたかい。約半世紀前のこの争議を背景に、現代の地方テレビ局のレポーターの目を通して、リストラと労働者の団結をテーマにしたのがこの映画です。「ひだるか」とは、大牟田の炭鉱労働者の間で使われていた言葉で、「ひもじく、だるい」の意味です。

小泉構造改革のもと、現代社会では、リストラの名のもとに、多くの労働者が職場を追われ、生活苦とたたかっています。福岡のある地方テレビ局も、業績不振から脱却するために、人員整理と海外資本による企業買収が持ち上がります。局の人気女性キャスターの原陽子は、恋人が局の重役ながらも、若手の現場記者らと番組づくりにはげみますが、労働組合が分裂工作されるにおよんで、次第に局のやりかたに疑問をもちます。そして、45年前に起こった1200人の炭鉱労働者の首切りに対する反リストラの「三池争議」が全国を揺るがしたことを知り、「三池争議」を知る取材をはじめます。そして、自分の父親も「三池争議」に関わった一人だったことを知ります…。

監督は『むっちゃんの詩』の港健二郎さん。ヒロイン役には新人の岡本美沙さん。自身も新進気鋭のピアニストとして活躍中で、この映画の中でもピアノを弾くシーンができます。星由里子、沢田亜矢子、佐藤充などの役者が脇を固めています。

「がんばろう」「地底のうた」などの荒木栄のうたごえが流れているのも、当時を知る人には胸にくるでしょう。いま全国各地で上映運動がまっ最中です。

摂津 河内 和泉 おおさか三国誌 ……8

（大東市）

「野崎まいり」とお染久松

野崎観音で有名な寺は正式には慈眼寺。年配の人なら、この寺にゆかりの「お染久松」「野崎まいり」の言葉を聞いたことがあるでしょう。落語のネタでは「野崎参り」もあり、歌舞伎では近松半二作の『新版歌祭文』（野崎村の場）の舞台として知られています。

「野崎まいり」は江戸時代から伝わる慈眼寺のまつりで、正しくは「無縁経法要」といい、有縁無縁すべてのものに感謝の経をささげる行事として、庶民の楽しみのひとつでした。大川や寝屋川から屋形船で野崎観音におまいりする場面は東海林太郎の「♪野崎まいりは屋形船でまいろう」（野崎小唄）のフレーズでも有名です。「お染久松」は商家の娘・お染と手代・久松の悲恋物語。慈眼寺の境内に2人の「比翼塚」が残っています。

現代の「野崎まいり」は5月1日から10日まで。野崎駅から慈眼寺までの参道には露店がズラリ。毎年200店は集まってくるといいます。境内では、寄席、蓄音機ライブ、昔懐かしい大道芸も。あのフーテンの寅さんがフラリと現れてきそうな感じです。

ゴールデンウィークは「野崎まいり」で参道は露店でいっぱい

境内にある「お染久松比翼塚」

大阪の戦跡を歩く 第7歩

動物慰霊碑

（大阪市天王寺区・天王寺動物園内）

公園内に建つ動物慰霊碑

戦時中には猛獣たちの処分も

天王寺動物園は1915年（大正4）に、当時の東区本町にあった大阪博物場を移設してできたもの。このときの象の移動は大いに話題になりました。大阪の子どもたちに親しまれた天王寺動物園は、戦争末期の1943年（昭和18）、空襲で動物が逃走し危険という理由で、ライオン、トラ、シロクマなど25頭の猛獣が処分されてしまいました。こうした戦争の犠牲になった動物はじめ、亡くなった動物の慰霊碑が、ペンギン舎の前に建っています。親子で賑わう動物園ですが、こうした動物の悲劇を知っている人は少ないでしょう。ぜひ、説明板がほしいところです。

いまも心に響く名詩・名歌・名語録

『夏の想い出』

作詞・江間章子
作曲・中田喜直

①夏がくれば思い出す　はるかな尾瀬遠い空／霧の中に浮かびくる　優しい影　野の小道／水芭蕉の花が咲いている　夢見て咲いている水のほとり／シャクナゲ色にたそがれる　はるかな尾瀬　遠い空
②夏がくれば思い出す　はるかな尾瀬　野の旅よ／花のなかにそよそよとゆれゆれる浮き島よ／水芭蕉の花が匂っている　夢見て匂っている水のほとり／まなこつぶれば懐かしい　はるかな尾瀬　遠い空（1969年6月、ラジオ歌謡で紹介され、この歌の広がりで、尾瀬が一躍脚光を浴びた。）

『夏は来ぬ』

作詞・佐々木信綱
作曲・小山作之助

①卯の花のにおうかきねに／ほととぎす早やもき鳴きて／しのび音もらす夏は来ぬ　②五月雨のそそぐ山田に／早乙女が裳裾ぬらして／玉苗植える夏は来ぬ　③橘のかおる軒端の／窓ちかくホタルとびかい／おこたり諫むる夏は来ぬ　④おうち散る川辺の宿の／門遠くくいな声して／夕日涼しき夏は来ぬ　⑤五月やみホタルとびかい／くいな鳴き卯の花さきて／早苗植えわたす夏は来ぬ（1896年に創られた曲。卯の花…ウツギの花、おうち…栴檀の木）